

## Meeting Report

## 第39回サンアントニオ乳癌シンポジウム

39th Annual San Antonio Breast Cancer Symposium (SABCS 2016)

会期：2016年12月6～10日

会場：Henry B. Gonzalez Convention Center(サンアントニオ)

山本 豊

熊本大学大学院生命科学研究部乳腺・内分泌外科分野准教授

### はじめに

サンアントニオ乳癌シンポジウム(SABCS)は毎年12月初旬に米国テキサス州サンアントニオ市で開催されており、約90カ国から約7,500人が参加する国際会議である。今回で39回目となり、2016年12月6～10日まで多くの新規知見についてホットなディスカッションが繰り返された。本国際会議の目的は、世界中の乳がんの基礎研究者や臨床医に乳がんの生物学、病因、予防、治療に関する最先端の科学的情報を提供することである。2007年にUniversity of Texas Health Science Center at San AntonioのCancer Therapy & Research Center(CTRC)とAmerican Association for Cancer Research(AACR)を共同で開催することが決定され、以後の会議の名称はCTRC-AACR San Antonio Breast Cancer Symposiumと呼ばれており、2005年からのスポンサーであるBaylor College of Medicineを加えた3者の共同開催となっている。このような背景もあり、本国際会議は米国臨床腫瘍学会(ASCO)年次集会に比べ、トランスレーショナルリサーチや基礎研究のウエイトが高く、今後の乳がん研究の進歩や方向性が示される大変重要な国際会議である。口演およびポスターは学会ホームページ上でみることができ。

今回のトピックスとしては、5年を超える術後内分泌療法の意義の再検討、サバイバーシップにおける薬物療法の諸問題とその対応、腫瘍浸潤リンパ球を含む免疫系の乳がんへの関与、DNA修復欠損とpoly[ADP-ribose]polymerase(PARP)阻害薬やプラチナ製剤の効果との関連、細胞外小胞内のmicroRNA発現の意義、小胞体ストレスと乳がんとの関係、転移/再発乳がんに対する遺伝子異常に基づく治療の将来展望、IBM Watsonとtumor boardによる治療方針決定の比較などがあり、きわめて充実した内容であった。

本稿では、一般演題のなかから主に分子標的治療に関する話題について述べる。

### PERTAIN 試験

閉経後ヒト上皮成長因子受容体(HER)2陽性ホルモン受

容体(HR)陽性局所進行/転移性乳がんに対する1次治療として、トラスツズマブ+アロマターゼ阻害薬(AI)へのペルツズマブの追加効果と安全性を検討した非盲検下多施設共同ランダム化第II相臨床試験の結果が報告された。

HER2とエストロゲン受容体(ER)の間にはクロストークがあり、これが内分泌療法抵抗性と関連があることが知られている。これまでに、AI単独に比べトラスツズマブとAIの併用は無増悪生存期間(PFS)を有意に延長したことや、プラセボ+トラスツズマブ+ドセタキセルに対し、ペルツズマブ+トラスツズマブ+ドセタキセルは有意にPFSおよび全生存期間(OS)を延長したことが報告されていた。これらの背景から、AIと抗HER2療法2種の併用療法はAI+トラスツズマブよりも高い効果が得られることが期待された。

プロトコル治療は標準群をトラスツズマブ+AIとし、試験群をペルツズマブ+トラスツズマブ+AIとした。導入化学療法としてそれぞれの群においてタキサン系製剤(ドセタキセルあるいはパクリタキセル)と抗HER2療法の併用療法が18～24週許容されている。

両群にそれぞれ129例が割り付けられた。両群間に偏りはなく、約28%が術前あるいは術後にトラスツズマブ治療を受けていた。約71%に内臓転移があり、約33%は3臓器以上の転移を有していた。導入化学療法としてタキサン系製剤と抗HER2療法の併用療法を受けた患者は約57%であった。

主要評価項目であるPFSは試験群で有意に延長した(標準群15.8ヵ月、試験群18.9ヵ月、ハザード比(HR)0.65, 95%信頼区間(CI): 0.48～0.89,  $p=0.007$ )。副次的評価項目である奏効率には両群間に有意差はなかった(標準群55.7%, 試験群63.3%,  $p=0.254$ )。奏効期間は試験群で有意に長かった(標準群15.1ヵ月、試験群27.1ヵ月, HR 0.57, 95%CI: 0.36～0.91,  $p=0.018$ )。有害事象はペルツズマブに関連したものが増加したが新規のものではなく、両群とも忍容性は高かった。

本試験ではタキサン系製剤と抗HER2療法の併用療法を導入化学療法として半数以上の症例で施行されており、トラスツズマブ+AIへのペルツズマブの追加効果が真にど